

第5回 ベクトルの積分と応用

理学部 齊藤国靖*

2023年4月5日

ベクトルの微分に続き、第5回ではベクトルの積分について説明する。また、ベクトルの微分の応用として、2次元極座標や3次元球座標における運動方程式を導出する。力学の問題を解くのにデカルト座標以外の座標系を用いることがあるが、基本ベクトルの変換と微分を適切に行う必要があるため、後半の内容は応用上も重要である。

1 ベクトルの積分

3次元のベクトル関数

$$\mathbf{A}(t) = A_x(t)\mathbf{e}_x + A_y(t)\mathbf{e}_y + A_z(t)\mathbf{e}_z \quad (1)$$

の両辺を変数 t で積分すると

$$\int \mathbf{A}(t)dt = \int A_x(t)dt \mathbf{e}_x + \int A_y(t)dt \mathbf{e}_y + \int A_z(t)dt \mathbf{e}_z \quad (2)$$

となる。ここで、基本ベクトル $\mathbf{e}_x, \mathbf{e}_y, \mathbf{e}_z$ は t に依らないので積分の外にある。式 (2) より、ベクトル関数を積分することは各成分を積分することと同じであることが解る。

ベクトル関数の積分を

$$\mathbf{D}(t) \equiv \int \mathbf{A}(t)dt \quad (3)$$

と置けば、ベクトル関数の定積分は

$$\int_a^b \mathbf{A}(t)dt = \mathbf{D}(b) - \mathbf{D}(a) \quad (4)$$

となる。

* k.saitoh@cc.kyoto-su.ac.jp

2 ベクトルの部分積分

2.1 スカラー倍の積分

第4回の結果より、ベクトル関数のスカラー倍の微分は

$$\frac{d}{dt}(f\mathbf{A}) = \frac{df}{dt}\mathbf{A} + f\frac{d\mathbf{A}}{dt} \quad (5)$$

である。両辺を t で積分して整理すると

$$\begin{aligned} f\mathbf{A} &= \int \frac{df}{dt}\mathbf{A}dt + \int f\frac{d\mathbf{A}}{dt}dt \\ \therefore \int f\frac{d\mathbf{A}}{dt}dt &= f\mathbf{A} - \int \frac{df}{dt}\mathbf{A}dt \end{aligned} \quad (6)$$

となる。これはベクトル関数の部分積分として有用である。

2.2 内積の積分

同じく第4回の結果より、ベクトル関数の内積の微分は

$$\frac{d}{dt}(\mathbf{A} \cdot \mathbf{B}) = \frac{d\mathbf{A}}{dt} \cdot \mathbf{B} + \mathbf{A} \cdot \frac{d\mathbf{B}}{dt} \quad (7)$$

である。両辺を t で積分して整理すると

$$\begin{aligned} \mathbf{A} \cdot \mathbf{B} &= \int \frac{d\mathbf{A}}{dt} \cdot \mathbf{B}dt + \int \mathbf{A} \cdot \frac{d\mathbf{B}}{dt}dt \\ \therefore \int \mathbf{A} \cdot \frac{d\mathbf{B}}{dt}dt &= \mathbf{A} \cdot \mathbf{B} - \int \frac{d\mathbf{A}}{dt} \cdot \mathbf{B}dt \end{aligned} \quad (8)$$

となる。これもベクトル関数の部分積分である。

2.3 外積の積分

同様に、外積の微分は

$$\frac{d}{dt}(\mathbf{A} \times \mathbf{B}) = \frac{d\mathbf{A}}{dt} \times \mathbf{B} + \mathbf{A} \times \frac{d\mathbf{B}}{dt} \quad (9)$$

であるから、両辺を t で積分して

$$\begin{aligned} \mathbf{A} \times \mathbf{B} &= \int \frac{d\mathbf{A}}{dt} \times \mathbf{B}dt + \int \mathbf{A} \times \frac{d\mathbf{B}}{dt}dt \\ \therefore \int \mathbf{A} \times \frac{d\mathbf{B}}{dt}dt &= \mathbf{A} \times \mathbf{B} - \int \frac{d\mathbf{A}}{dt} \times \mathbf{B}dt \end{aligned} \quad (10)$$

となる。これもベクトル関数の部分積分である。

3 極座標における運動方程式

2次元極座標における基本ベクトルは動径方向の e_r およびそれに垂直な角度方向の e_θ がある。これらとデカルト座標における基本ベクトル e_x, e_y との関係は

$$e_r = \cos \theta e_x + \sin \theta e_y \quad (11)$$

$$e_\theta = -\sin \theta e_x + \cos \theta e_y \quad (12)$$

で与えられる。ここで、位置ベクトルが時間 (変数 t) と共に変化するとき、極座標における基本ベクトル e_r, e_θ は向きを変えるが、 e_x, e_y は変化しないことに注意しよう。つまり、 e_r, e_θ は t のベクトル関数だが、 e_x, e_y は定ベクトルである。

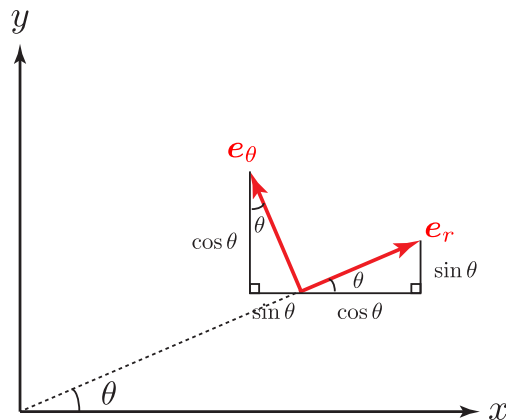


図 1

式 (11) の両辺を t で微分すると

$$\begin{aligned} \dot{e}_r &= -\dot{\theta} \sin \theta e_x + \dot{\theta} \cos \theta e_y \\ &= \dot{\theta} (-\sin \theta e_x + \cos \theta e_y) \\ &= \dot{\theta} e_\theta \end{aligned} \quad (13)$$

となる。但し、 e_x, e_y が t に依らないことと、式 (12) を用いた。同様に、式 (12) の両辺を t で微分すると

$$\begin{aligned} \dot{e}_\theta &= -\dot{\theta} \cos \theta e_x - \dot{\theta} \sin \theta e_y \\ &= -\dot{\theta} (\cos \theta e_x + \sin \theta e_y) \\ &= -\dot{\theta} e_r \end{aligned} \quad (14)$$

となる。但し、式 (11) を用いた。

次に、極座標における位置ベクトルは

$$\mathbf{r} = r e_r \quad (15)$$

で与えられる。但し、 $r \equiv |\mathbf{r}|$ は位置ベクトルの大きさを表す動径距離である。式 (15) の両辺を t で微分すると

$$\begin{aligned}\dot{\mathbf{r}} &= \dot{r}\mathbf{e}_r + r\dot{\mathbf{e}}_r \\ &= \dot{r}\mathbf{e}_r + r\dot{\theta}\mathbf{e}_\theta\end{aligned}\quad (16)$$

である。但し、式 (13) を用いた。従って、極座標における速度を

$$\mathbf{v} = \dot{\mathbf{r}} \equiv v_r\mathbf{e}_r + v_\theta\mathbf{e}_\theta \quad (17)$$

とすれば、動径方向と角度方向の速度成分はそれぞれ

$$v_r = \dot{r}, \quad v_\theta = r\dot{\theta} \quad (18)$$

となる。さらに、式 (16) の両辺を t で微分すると

$$\begin{aligned}\ddot{\mathbf{r}} &= \ddot{r}\mathbf{e}_r + \dot{r}\dot{\mathbf{e}}_r + \dot{r}\dot{\theta}\mathbf{e}_\theta + r\ddot{\theta}\mathbf{e}_\theta + r\dot{\theta}\dot{\mathbf{e}}_\theta \\ &= \ddot{r}\mathbf{e}_r + \dot{r}\dot{\theta}\mathbf{e}_\theta + \dot{r}\dot{\theta}\mathbf{e}_\theta + r\ddot{\theta}\mathbf{e}_\theta - r\dot{\theta}^2\mathbf{e}_r \\ &= (\ddot{r} - r\dot{\theta}^2)\mathbf{e}_r + (r\ddot{\theta} + 2\dot{r}\dot{\theta})\mathbf{e}_\theta\end{aligned}\quad (19)$$

である。但し、式 (13) と (14) を用いた。従って、極座標における加速度を

$$\mathbf{a} = \ddot{\mathbf{r}} \equiv a_r\mathbf{e}_r + a_\theta\mathbf{e}_\theta \quad (20)$$

とすれば、動径方向と角度方向の加速度成分はそれぞれ

$$a_r = \ddot{r} - r\dot{\theta}^2, \quad a_\theta = r\ddot{\theta} + 2\dot{r}\dot{\theta} \quad (21)$$

となる。

質量 m の質点の運動方程式

$$m\mathbf{a} = \mathbf{F}$$

において、力 \mathbf{F} を動径方向と角度方向に

$$\mathbf{F} = F_r\mathbf{e}_r + F_\theta\mathbf{e}_\theta \quad (22)$$

と分解すれば、式 (21) より

$$m(\ddot{r} - r\dot{\theta}^2) = F_r \quad (23)$$

$$m(r\ddot{\theta} + 2\dot{r}\dot{\theta}) = F_\theta \quad (24)$$

となることが解る。

4 球座標における運動方程式

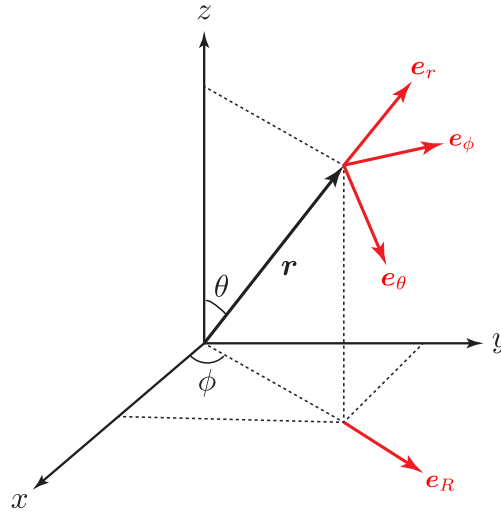


図 2

3次元球座標における基本ベクトルは e_r およびそれに垂直な2つの角度方向の単位ベクトル e_θ, e_ϕ がある。これらとデカルト座標における基本ベクトル e_x, e_y, e_z との関係を求めるため、 e_ϕ が xy 平面内にあることに注目する。2次元極座標の場合と同様、 xy 平面内の単位ベクトルは

$$e_R = \cos \phi e_x + \sin \phi e_y \quad (25)$$

$$e_\phi = -\sin \phi e_x + \cos \phi e_y \quad (26)$$

で与えられる。ここで、 e_R は極座標における動径方向の基本ベクトルに対応するものである。次に、 e_R に沿って R 軸を導入すると、 e_r, e_θ は zR 平面内にあることが解る。従って、2次元極座標の場合と同様、 zR 平面内の単位ベクトルは

$$e_r = \cos \theta e_z + \sin \theta e_R \quad (27)$$

$$e_\theta = -\sin \theta e_z + \cos \theta e_R \quad (28)$$

で与えられる。なお、式 (27) に $\sin \theta$ を掛けて、式 (28) に $\cos \theta$ を掛けたものを足すと

$$\begin{aligned} \sin \theta e_r + \cos \theta e_\theta &= (\sin^2 \theta + \cos^2 \theta) e_R \\ \therefore e_R &= \sin \theta e_r + \cos \theta e_\theta \end{aligned} \quad (29)$$

となるのが解る。式 (27) と (28) の e_R に式 (25) を代入すると、球座標における基本ベクトル e_r, e_θ, e_ϕ とデカルト座標における基本ベクトル e_x, e_y, e_z の関係として

$$e_r = \sin \theta \cos \phi e_x + \sin \theta \sin \phi e_y + \cos \theta e_z \quad (30)$$

$$e_\theta = \cos \theta \cos \phi e_x + \cos \theta \sin \phi e_y - \sin \theta e_z \quad (31)$$

$$e_\phi = -\sin \phi e_x + \cos \phi e_y \quad (32)$$

が得られる．極座標の場合と同様，変数 t によって e_r, e_θ, e_ϕ は向きを変えるが， e_x, e_y, e_z は変化しないことに注意しよう．

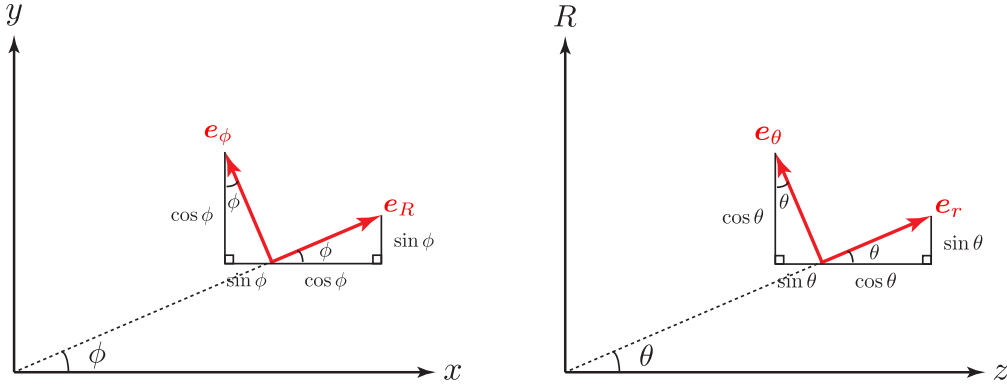


図 3

式 (30) の両辺を t で微分すると

$$\begin{aligned}\dot{e}_r &= \dot{\theta} \cos \theta \cos \phi e_x - \dot{\phi} \sin \theta \sin \phi e_x + \dot{\theta} \cos \theta \sin \phi e_y + \dot{\phi} \sin \theta \cos \phi e_y - \dot{\theta} \sin \theta e_z \\ &= \dot{\theta} (\cos \theta \cos \phi e_x + \cos \theta \sin \phi e_y - \sin \theta e_z) + \dot{\phi} \sin \theta (-\sin \phi e_x + \cos \phi e_y) \\ &= \dot{\theta} e_\theta + \dot{\phi} \sin \theta e_\phi\end{aligned}\quad (33)$$

となる．但し， e_x, e_y, e_z が t に依らないことと，式 (31) と (32) を用いた．同様に，式 (31) の両辺を t で微分すると

$$\begin{aligned}\dot{e}_\theta &= -\dot{\theta} \sin \theta \cos \phi e_x - \dot{\phi} \cos \theta \sin \phi e_x - \dot{\theta} \sin \theta \sin \phi e_y + \dot{\phi} \cos \theta \cos \phi e_y - \dot{\theta} \cos \theta e_z \\ &= -\dot{\theta} (\sin \theta \cos \phi e_x + \sin \theta \sin \phi e_y + \cos \theta e_z) + \dot{\phi} \cos \theta (-\sin \phi e_x + \cos \phi e_y) \\ &= -\dot{\theta} e_r + \dot{\phi} \cos \theta e_\phi\end{aligned}\quad (34)$$

となる．但し，式 (30) と (32) を用いた．また，式 (32) の両辺を t で微分すると

$$\begin{aligned}\dot{e}_\phi &= -\dot{\phi} \cos \phi e_x - \dot{\phi} \sin \phi e_y \\ &= -\dot{\phi} e_R \\ &= -\dot{\phi} \sin \theta e_r - \dot{\phi} \cos \theta e_\theta\end{aligned}\quad (35)$$

となる．但し，式 (29) を用いた．

次に，球座標における位置ベクトルも式 (15) で与えられるから，両辺を t で微分して

$$\begin{aligned}\dot{\mathbf{r}} &= \dot{r} e_r + r \dot{e}_r \\ &= \dot{r} e_r + r \dot{\theta} e_\theta + r \dot{\phi} \sin \theta e_\phi\end{aligned}\quad (36)$$

となる．但し，式 (33) を用いた．従って，球座標における速度を

$$\mathbf{v} = \dot{\mathbf{r}} \equiv v_r e_r + v_\theta e_\theta + v_\phi e_\phi\quad (37)$$

とすれば、動径方向と2つの角度方向の速度成分はそれぞれ

$$v_r = \dot{r}, \quad v_\theta = r\dot{\theta}, \quad v_\phi = r\dot{\phi}\sin\theta \quad (38)$$

となる。さらに、式(36)の両辺を t で微分すると

$$\begin{aligned} \ddot{\mathbf{r}} &= \ddot{r}\mathbf{e}_r + \dot{r}\dot{\mathbf{e}}_r + \dot{r}\dot{\theta}\mathbf{e}_\theta + r\ddot{\theta}\mathbf{e}_\theta + r\dot{\theta}\dot{\mathbf{e}}_\theta + \dot{r}\dot{\phi}\sin\theta\mathbf{e}_\phi + r\ddot{\phi}\sin\theta\mathbf{e}_\phi + r\dot{\phi}\dot{\theta}\cos\theta\mathbf{e}_\phi + r\dot{\phi}\sin\theta\dot{\mathbf{e}}_\phi \\ &= \ddot{r}\mathbf{e}_r + \dot{r}\dot{\theta}\mathbf{e}_\theta + \dot{r}\dot{\phi}\sin\theta\mathbf{e}_\phi + \dot{r}\dot{\theta}\mathbf{e}_\theta + r\ddot{\theta}\mathbf{e}_\theta - r\dot{\theta}^2\mathbf{e}_r + r\dot{\theta}\dot{\phi}\cos\theta\mathbf{e}_\phi + \dot{r}\dot{\phi}\sin\theta\mathbf{e}_\phi + r\ddot{\phi}\sin\theta\mathbf{e}_\phi \\ &\quad + r\dot{\phi}\dot{\theta}\cos\theta\mathbf{e}_\phi - r\dot{\phi}^2\sin^2\theta\mathbf{e}_r - r\dot{\phi}^2\cos\theta\sin\theta\mathbf{e}_\theta \\ &= (\ddot{r} - r\dot{\theta}^2 - r\dot{\phi}^2\sin^2\theta)\mathbf{e}_r + (r\ddot{\theta} + 2\dot{r}\dot{\theta} - r\dot{\phi}^2\cos\theta\sin\theta)\mathbf{e}_\theta \\ &\quad + (r\ddot{\phi}\sin\theta + 2\dot{r}\dot{\phi}\sin\theta + 2r\dot{\theta}\dot{\phi}\cos\theta)\mathbf{e}_\phi \end{aligned} \quad (39)$$

である。但し、式(33), (34), (35)を用いた。従って、球座標における加速度を

$$\mathbf{a} = \ddot{\mathbf{r}} \equiv a_r\mathbf{e}_r + a_\theta\mathbf{e}_\theta + a_\phi\mathbf{e}_\phi \quad (40)$$

とすれば、動径方向と2つの角度方向の加速度成分はそれぞれ

$$a_r = \ddot{r} - r\dot{\theta}^2 - r\dot{\phi}^2\sin^2\theta \quad (41)$$

$$a_\theta = r\ddot{\theta} + 2\dot{r}\dot{\theta} - r\dot{\phi}^2\cos\theta\sin\theta \quad (42)$$

$$a_\phi = r\ddot{\phi}\sin\theta + 2\dot{r}\dot{\phi}\sin\theta + 2r\dot{\theta}\dot{\phi}\cos\theta \quad (43)$$

となる。

運動方程式において、力 \mathbf{F} を

$$\mathbf{F} = F_r\mathbf{e}_r + F_\theta\mathbf{e}_\theta + F_\phi\mathbf{e}_\phi \quad (44)$$

と分解すれば、式(41)-(43)より

$$m(\ddot{r} - r\dot{\theta}^2 - r\dot{\phi}^2\sin^2\theta) = F_r \quad (45)$$

$$m(r\ddot{\theta} + 2\dot{r}\dot{\theta} - r\dot{\phi}^2\cos\theta\sin\theta) = F_\theta \quad (46)$$

$$m(r\ddot{\phi}\sin\theta + 2\dot{r}\dot{\phi}\sin\theta + 2r\dot{\theta}\dot{\phi}\cos\theta) = F_\phi \quad (47)$$

となることが解る。

- 問題

3次元円柱座標における基本ベクトルが

$$\mathbf{e}_r = \cos\theta\mathbf{e}_x + \sin\theta\mathbf{e}_y \quad (48)$$

$$\mathbf{e}_\theta = -\sin\theta\mathbf{e}_x + \cos\theta\mathbf{e}_y \quad (49)$$

$$\mathbf{e}_h = \mathbf{e}_z \quad (50)$$

で与えられることを用いて、円柱座標における運動方程式の表式を求めよ。